

音 楽

教科別研究主題 一人一人を生かす音楽表現の指導の在り方

研究概要及び索引語

本研究では、学習指導の改善や充実を図るため、教科担当者と児童生徒を対象に、音楽科の指導に関する実態調査を行った。その結果を踏まえ、主体的に活動できる音楽科の表現の指導の在り方について探った。さらに、児童生徒一人一人が自分のよさや可能性を発揮するための指導の在り方について、思いや願いを生かしたアンサンブル曲づくりや歌唱における表現力を高めるグループ合唱等の授業研究を通して究明した。

索引語 : 音楽, 主体的活動, 意識・実態調査, 表現力, 合唱指導

目 次

はじめに	63
1 研究のねらい	63
2 研究主題に関する基本的な考え方	63
3 音楽科学習指導に対する意識・実態調査	64
4 授 業 研 究	67
【授業研究1】	
小学校第6学年「一人一人の思いや願いを生かしたアンサンブル曲づくり」の指導	68
【授業研究2】	
中学校第2学年「生徒一人一人の表現力を高めるグループ合唱」の指導	73
おわりに	78

はじめに

新しい学力観に立つ音楽科の学習指導は、児童生徒一人一人が自分のよさや可能性を發揮しながら自然や人間、社会、文化などに関わりを持ち、自ら課題を設定し、解決していく過程にある。また、音楽の様々な活動を通して感覚や感性を磨いていくことは、児童生徒一人一人の生き方の中に豊かな心が育まれていくものとしてとらえることができる。児童生徒一人一人にとっては、今日、科学技術の進歩や目まぐるしく変化していく情報化社会の中で、膨大に蓄積された資料と共に、知識偏重の教育に埋没してしまわないため、自分のよさを認め、互いに高め合い、学んでいくための態度や能力を育成していくことが求められている。

音楽科では創造的な表現活動を重視し、児童生徒の中に潜在している感性に訴えることにより、既成の概念にとらわれない、自由な発想による表現活動を行うことができれば、児童生徒は自ら進んで表現活動に参加することができると思う。

1 研究のねらい

- (1) 音楽科指導の改善や充実を図るため、児童生徒の学習指導に関する実態を調査する。
- (2) 主体的に表現活動に取り組めるように、音楽科の学習指導の在り方について究明する。

2 研究主題に関する基本的な考え方

児童生徒一人一人のよさを生かすためには、児童生徒が自分のよさに気づき、その可能性を探りながら、自分で感じ取ったり、考えたり、判断したりすることができるように、学習を展開していく必要がある。そして、自分らしい声や表現の仕方で歌ったり、自分の演奏を友達の演奏の中に溶け込ませたりするなど、的確にあるいは創造的に、表現する力を身につけていけるようにすることが大切である。自ら進んで音楽を学ぶ意欲を培い、主体的で創造的な学習を進めていくためには、次の手だてが考えられる。

- (1) 音楽活動を通して、音楽に対する児童生徒一人一人の思いや願い、考え方や感じ方を生かすことによって感動が味わえ、内発的な学習の意欲が高められるようにする。
- (2) 音楽に対する児童生徒一人一人を理解するため、個々の児童生徒の興味・関心、感じ方、好み、感覚や能力等の特性についてとらえる。また、それらに影響を及ぼす社会環境、生活環境、家庭環境等の実態を把握するようにする。
- (3) グループ学習や個別学習等の学習形態を工夫し、児童生徒一人一人のアイデアを生かしたり、高めたりする場を設定することで、創意工夫をし、自ら音楽をつくりだせるようにし、個々のイメージに基づいた自由な発想による表現活動が活発になるようにする。
- (4) 児童生徒一人一人が一つの目標となる小さな発表会をもち、こころ一つに活動する過程で音楽を学ぶ楽しさや喜びを味わったり、自ら演奏に参加することで自分のよさに気づくようにし、成就感や満足感が得られるようにする。さらに、友達の演奏を鑑賞することによって、自分を省み、新たな課題を見だし、友達のよさを発見することに喜びが感じられるようにする。
- (5) 創造性を高める表現活動を重視し、新たな発想を生み出す基となる感性が育つようにする。特に「音楽をつくって表現する」活動を重視し、感性の育成に着目し、その活性化を図る。
- (6) 学習カードを活用することで、児童生徒がねらいや計画にそった活動を行えるようにし、自分の感じた音楽や活動に対して自己評価をすることで、次への課題が明確になるようにする。

3 音楽科実技指導に関する意識・実態調査

県内の公立小・中学校の音楽科担当教員及び児童生徒を対象に意識・実態調査を実施し、実技に関する実態を把握し、音楽科指導の諸問題を明らかにするとともに、授業改善の方向を探る。

(1) 調査対象

- 児童生徒…県内の各11校の小学校第5学年、第6学年、中学校第1学年から、それぞれ1クラスを対象にした。回答数は小学校 652人、中学校 345人、計 997人である。
- 教師……無作為に抽出した県内の小学校 100校、中学校 100校から、小学校については第5学年、第6学年の各担当者1人、中学校については音楽担当者1人を対象とした。回答数は小学校 100人、中学校 93人、計 193人である。

(2) 実施時期 平成6年10月24日から10月29日まで

(3) 調査項目、調査結果及び分析

児童生徒を対象にした調査内容と結果については、表1～5に示し、教師を対象にした調査内容と結果については、表6～10に示す。なお、表中の数値は、全て回答者数に対する各問の回答数の割合(%)である。

ア 児童生徒の意識・実態について

表1 児童生徒の主体的な音楽表現への取り組み

音楽の学習で、先生、友達、CD、カセットテープなどの演奏を聴いて、それを自分でも演奏するとができますか。	小5	小6	中1	全体
自信を持って演奏ができる。	8.2	8.7	6.8	7.9
演奏はできるがやや不安がある。	27.9	30.7	30.8	29.8
演奏するにはあまり自信がない。	42.0	33.8	36.4	37.4
演奏はまったく自信がない。	21.9	25.3	25.4	24.2

音楽の学習について簡単なメロディーやリズムを聴いたものを覚えることは、基本的なことである。覚えたものを何とか音で表現してみたい、という気持ちは自然なことである。しかし自信がないと答えている者が全体で61.6%いる。児童生徒が主体的に音楽表現へ取り組むためには、少しでも自信を持たせることが大切であり、そこにはさまざまな手だてが必要である。

表2 主体的に取り組むための手だて

合唱や合奏など複数で音楽を表現するとき、どんなことに気をつけていますか。	小5	小6	中1	全体
曲の仕組みや和音の組み合わせや変化に気をつけている。	9.4	11.1	13.0	11.2
和音の組み合わせや変化に、ひびきが合うように気をつけている。	12.9	12.7	16.0	13.9
それぞれのひびきがきれいになるように、気をつけている。	21.4	24.4	25.5	23.8
ことばやリズムが合うように、気をつけている。	29.5	25.0	21.6	25.4
周廻と合うよう気をつけているが、たまに合わないことがある。	23.0	22.8	19.2	21.7
他のパートを聴くと頭の中が混乱するので聴かないようにしている。	3.8	4.0	4.1	4.0

音楽を表現する以前に、いくつかの準備が必要である。まず、楽譜に書かれていることをより正確に把握しそれを音楽的にとらえるのだが、ややもすると形式的で機械的になりやすい。

各自が自分の音楽を明確にもつためには、表面的な音の流れから一歩深く踏み込む必要がある。そこで同一のグループやパート内で、お互いがより適切に表現できるように補ったり、工夫し合えるような態勢が取れるように支援することが望ましい。

表3 一人一人のよさを感じさせるための手だて

音楽の学習で歌唱を行うときに、どんなことに心がけて歌っていますか。	小5	小6	中1	全体
歌詞の内容や曲全体の構成をよく理解し、工夫して歌っている。	15.4	16.4	22.8	18.2
内容や構成などより曲の感じをつかむようにして歌っている。	51.1	49.7	44.6	48.5
内容や構成などより元気よく歌い、曲の感じをだすようにしている。	25.7	25.0	21.9	24.2
思うようにできないし、声もよく出せないのであまり歌っていない。	7.2	8.0	9.2	8.1

歌唱は音楽教育の中で基礎・基本とされているが、実態としては案外軽く受け取られている。ことばやその意味について児童生徒一人一人が感じ取り、それぞれのイメージを歌として表現させていかなければならない。そこで、題材やことばを限定したり、あらかじめ共通の場を設定することによって、一人一人の感じ方や考え方の中によさを発見することができる。それらのよさをお互いに認め、高め合えるように、歌唱や合唱の表現活動を行わなければならない。

表4 創造的な音楽学習

これまでに自分の思ったこと（イメージ）を、いろいろな楽器や楽譜（図形楽譜も含む）で表したことがありますか。	小5	小6	中1	全体
表したことがある。	43.6	48.0	31.1	40.9
表したことはない。	56.4	52.0	68.9	59.1

音楽づくりの学習は、音そのものに対する基礎的な取り組みの一つとしてとらえられるが、その学習の浸透状況は小学校6年で48.0%である。また、中学校においては31.1%と少ない。

児童生徒が自分なりのイメージをもつとき、音楽以前の単一のものから塊、集合体などの音楽素材によるひびきや効果音等からアプローチをした方が分かりやすい。そこで、自分のイメージを表現する手段として音楽の仕組みや成り立ちなどを、少しずつ段階的に、そして、分かりやすく理解させたい。音楽づくりは重要な学習活動の一つである。

表5 音楽活動と学習形態

音楽活動をしていく中で、音楽の豊かさ、美しさ、喜びを一番感じるのは、どんなときですか。	小5	小6	中1	全体
歌唱（独唱、重唱、合唱）をしているとき。	19.6	18.7	32.8	23.7
器楽（独奏、重奏、合奏）を演奏しているとき。	37.2	36.1	19.5	30.9
創作（つくって表現する活動）をしているとき。	6.9	5.0	3.0	5.0
鑑賞をしているとき。	20.0	27.8	29.9	25.9
あまり感じたことがない。	14.1	11.7	14.8	13.5

音楽活動はただ単に音を出したり聞いたりするだけでなく、その音によって感じ、それをいかにイメージとしてとらえていくかが大切である。児童生徒は主体的に表現することができ、一人一人の気持ちを協調させ、一体となって音楽活動をすることによって感性を高めることができる。それは音楽のよさとして実感することでもある。そのことが感動をよび、さらなる意欲へと発展させることにつながる。具体的に学習形態別にみると、小学生の37.9%が器楽演奏で、中学生は32.8%が歌唱によって、音楽のよさを感じているのが分かる。

学習形態は単元目標や題材の設定によって決められていくが、児童生徒の実態や設備等ではなく、行事や指導者の都合等限られた枠内で、学習形態が決められている例が少なくない。特に歌唱は視唱力として豊かな音楽観を身につけるために必要な基礎学力となるため、できるだけ継続的に行って身につけさせたい。

イ 主体的な音楽表現への教師の取り組みについて

表6 意欲を高めるための工夫

音楽の学習指導では、児童生徒が主体的に活動することで意欲が高められるといわれていますが、現在はどうのような指導を行っていますか。	小学	中学	全体
主体的に活動するように積極的に指導をしてる。	7.0	16.1	11.6
できるだけ、主体的に活動するように指導をしてる。	66.0	75.2	70.6
主体的に活動していないので、少しずつ切り替えて指導をしてる。	22.0	6.5	14.3
主体的に活動していないので、指示しながら指導をしてる。	4.0	2.2	3.1
主体的に活動するような指導はほとんどしていない。	0.0	0.0	0.0

小学校では26.0%が従来通り、教師主導の学習指導を行っている。児童生徒が意欲的に学習活動を行うためには、教師はその内容を吟味し一人一人が主体的に取り組めるように、支援を行わなければならない。そのためにも、教師自身はできるだけ早く児童生徒の側に立てるように、指導の観点を切り替えていく必要がある。

表7 指導目標の設定

新しい学力観の目指す資質や能力を、児童生徒が自ら身につけることができるような指導目標を設定していますか。	小学	中学	全体
設定している。	76.0	90.3	83.2
設定していない。	24.0	9.7	16.9

指導目標は年間計画、題材計画、また個々の授業において設定しなければならない。児童生徒が主体的に学習活動を行うためには、しっかりした学習計画が必要である。これに基づいて、児童生徒は何を学び、どう身につけるか、また、彼ら一人一人がどんな目標を持ち、自己の計画をたて、活動するかという一つのながれを含む構想と、個々における細かい指導や適切な助言等の設定の手だてが大事である。小学校の24.0%中学校の9.7%は設定していないので、早期に改善を促したい。

表8 児童生徒一人一人の実態の把握についての手だて

児童生徒一人一人のこれまでの音楽的経験や音楽的な特徴などを把握したり、個々の学習ベースを理解するために、あなたは現在どんな手だてを取っていますか。	小学	中学	全体
経験や体験をアンケート形式にまとめ調査している。	6.3	15.4	7.2
学習カードをつくって調査している。	11.5	30.8	21.2
実技テストや実音テストを行って調査している。	22.0	14.8	18.4
グループで演奏発表させて調査している。	35.1	22.0	28.6
授業中まめに観察をしながら調査している。	22.0	14.8	18.4
作文やレポートを書かせて調査している。	2.6	1.1	1.9

授業を行う上で教師は、児童生徒一人一人が持っている能力や知識等を把握することが大切である。そして、教師はいかなる場合でもしっかりした調査を行い、一人一人が持っているよさを認め質的に高まるように支援を行う必要がある。

表9 教材や題材の工夫改善

児童生徒一人一人の資質や能力を生かすため、教師自身による適切な題材、教材の開発や工夫等をしていますか。	小学	中学	全体
している。	52.0	79.6	65.8
していない。	48.0	20.4	34.2

題材や教材の選択は、児童生徒一人一人の資質や能力に合わせ、適切に行うことが望ましい。一斉授業で行い、一人一人の個人差が激しいうえに題材や教材も、ただ単にそのままの形で使用していることが大変多い。そこで、児童生徒の側に立って少し手を加えただけでも質的に大きく変化する。例えば、楽曲のテンポや高さを少し変えるだけでも、かなり楽に表現できる。やはり、綿密な指導計画と児童生徒一人一人へのきめ細かな配慮が大事である。

表10 児童生徒の意欲的な表現活動における学習形態

児童生徒に音楽の楽しさ、美しさ、喜びをより多く感じさせるために、どんな学習形態を取って工夫していますか。	小学	中学	全体
歌唱（独唱、重唱、合唱）による形態	25.0	75.2	50.1
器楽（独奏、重奏、合奏）による形態	45.0	17.2	31.1
創作（即興表現、旋律創作、創造的な表現）による形態	22.0	5.4	13.7
工夫していない。	3.0	2.2	2.6

児童生徒はどんな学習形態で、どんな場面のときに音楽の楽しさ、美しさや喜びを感じるのか。さらに、どのような状況になると感動体験が得られるのか。それらは教師自身がよく知っている訳であるし、どうすれば得やすいかその手だてもよく分かっていることが多い。そのためややもすると、児童生徒にとって重要な中間の部分を端折ってしまったり、時間を短縮してしまう。そして、結果だけを比較したり評価をして終わってしまうことが案外多い。児童生徒一人一人が今何を望み、何を体験したいのか。目標は何なのか。また、教師はどこに指導目標を設定し、どこに時間をかけていくべきか。常に冷静に見極めていく必要がある。

(4) 意識・実態調査のまとめ

ア 教師に対する意識・実態調査

- 学習指導要領の趣旨にそって実技を中心に授業が行われている。
- 児童生徒の主体的な音楽表現への取り組みは、小・中学校ともかなり行われるようになってきている。
- 児童生徒の実態に関しては、教師は調査を行って音楽的な素養や特徴を把握している。

イ 児童生徒に対する意識・実態調査

- 児童生徒は自信をもって、主体的に音楽表現へ取り組みたいと望んでいる。
- 音楽表現の形態については小学校では器楽を、中学校では合唱を主に行っている。

4 授業研究

研究主題に関する基本的な考えと意識・実態調査の結果を踏まえ、音楽活動における児童生徒一人一人の表現や教材の工夫等の手だてを講じ、小・中学校各1校で授業研究を行った。

【授業研究1】 小学校第6学年「一人一人の思いや願いを生かしたアンサンブル曲づくり」の指導

(1) 授業研究のねらい

児童一人一人の思いや願いを、さまざまな音を組み合わせて創造的に表現したり、イメージを音で表わしたりすることによって、アンサンブル曲をつくって表現する活動を体験し、豊かな音楽表現への素地を育てていくことをねらいとしている。

その手だてとしては、「聖者の行進」を教材としてグループで学習し、自分のイメージに基づいて強弱や速度に変化をつけたり、一人一人のよさを生かしながら、前奏、間奏や後奏を創作し表現することによって、関心・意欲を高める指導の在り方を実践を通して明らかにする。

(2) 主体的に活動できるようにするための手立て

ア イメージと活動の見通しをもつ

(ア) 「聖者の行進」のビデオを鑑賞する。

曲をつくる活動に慣れていない児童にとっては、曲のつくり方や楽器選択の見通しがもてない。ビデオ鑑賞を行うことにより、児童は見通しをもって学習に取り組むことができる。

(イ) 曲目の解説をする。

曲についての解説を行うことによって、児童は曲に対するイメージをもつことができる。また、さまざまな音を組み立てて、幅広い自己表現活動を体験しようとする関心・意欲をもたせることができる。

(ウ) 学習カードを利用する。

学習カードに、「何をつくるか」、「何で表現するか」を「メニュー」として示したり、1時間ごとのめあてを書いたり、その時間の反省を書いたりすることによって学習の見通しをもつことができる。

イ 児童が曲をつくる時、コンピュータを活用することによって行う

(ア) つくった音楽を自動的に楽譜化する。

コンピュータとキーボードをつなぐことにより、キーボードで弾いた音楽がそのまま自動的に楽譜化できる。また、その楽譜をプリントアウトして、自分が選んだ楽器の演奏に活用することができる。今まで教師は、楽譜が書けるように手助けをしていたことを、コンピュータを活用することで補うことができる。児童の主体的な取り組みによって、児童のイメージした音楽が、最終的には1枚の楽譜となってできあがってくる。

(イ) つくった音楽を楽譜で確認しながら聴くことができる。

キーボードで入力した音楽を聴くときに、演奏しているところの楽譜を確認しながら聴くことができる。このことによって、自分の演奏した音楽がどのような音符になって出てくるのか、また、演奏のときのミスなども発見され、自分のイメージをより忠実に表現するためにも役立つ。さらに、大型ディスプレイを通して他のグループの児童にも、コンピュータの自動演奏で聴いてもらうことができる。

(ウ) つくった音楽をいろいろな楽器の演奏でシミュレーションできる。

同じ旋律でも、それをいろいろな楽器を変えて演奏させることができる。これは実際に自分たちが楽器を選んで演奏するときの一つの手掛かりとなり、主体的な活動への手助けとなる。

ウ 楽器、演奏方法を自由に選択する

自分たちでつくった音楽を表現するための方法は、そのグループの実態やつくった音楽に合わせて、自由に選択できるようにする。また、楽器の重複が少ないように配慮する。

エ 児童一人一人が役割をもつ

グループの人数は楽器の数、コンピュータへの入力、練習場の確保や発表時間等を考慮し、だれもが活躍しなければならないという原則にそって6人とする。一人一人が何らかの形で表現活動に関われるように配慮する。各パートにおいても、一人一人が音楽をつくって表現できるような場を設定し、主体性とグループ内での協力が生まれ一丸となれるようにする。

オ 練習場所を確保する

各グループが同一の部屋で練習すると、音が重なって能率が上がらない。そこで、空き教室や普段使用していない特別教室を利用し、各グループごとに部屋を割り当てて活動できるようにする。また、音楽室から離れている場所もあるため、移動の時間についても配慮する。

カ 発表会を設ける

各グループのお互いの情報交換の場として中間発表会を設ける。中間発表会では今までの学習の成果を発表しあうが、グループの中でのつまずきに対するヒントや自分たちの演奏についての感想が他のグループから得られ、次への新たな課題づくりに役立つ。また、学習のまとめとして最終発表会を開き、お互いの学習の成果を認め合う機会となるように配慮する。

キ 学習カードを作成する

自己評価については児童一人一人が使いやすいように、今日のめあてと学習を振り返って、項目で簡単に記述させる(図1)。また、各グループのカードへは、ねらい、役割、形態、特色等をまとめて記入させる(図2)。

今日の学習をふりかえって

時間	今日のめあて	学習をふりかえって	目標を達成した	達成を工夫した	達成した活動で	今日のめあてを達成した
1	楽譜をクマヤウ。	うつしてのたどせすぐ要領の付箋とわがった	◎	○	◎	◎
2	コンピュータをが いすはうい曲をつ くろウ。	こんかいのコンピ は初めてだったの で、よくわかんない から	○	○	○	○
3	いろいろなか、がさ をつかいてはうし い曲をつくり、いっ しょくけんめい、録 音しよう。	今日は、最初にれ うまくいかなかった けど、さあ、こ うまくいって、い い曲をつくらせて もらった。おかげ で、よかった。	◎	◎	◎	◎
4	いままでの練習の で、やったことを、 ほかのグループと かたりの発表を、 のぞいて、よく ふにしよう。	練習をいかにして、 たよりよく発表 できた。	◎	◎	◎	◎
5	発表の練習。 いっしょけんめい いままでの練習を いかして、さい はいえんめいしよう。	いろいろな班の たのしみですが、 いっしょけんめい 練習をがんばら なければ、とって まわすことが できませんでした。	◎	◎	◎	◎
6						
7						
8						
9						

図1 学習カード(個人用)

「自分たちのアンサンブルの曲を作ろう」

グループ名	わくねもみよ子組
グループの種類と役割 (つくととき)	二律... モックン 沼田... ピアノ 真津...オルガン (演奏するとき) 森田... テッキン 横山... 水だいこ 横山... ボンゴ
何を つくる か ・前奏・間奏・後奏 ・ハーモニー・和音伴奏 ・劇のメロディー ・リズム伴奏 ・拍子を数える ・物語風にする ・リズムを数える ・その他○○オリジナル (スペシャルメニュー)	前奏・間奏・後奏 (バランスも考えて)
何を 表現 する の か ・合奏・重奏 ・ピアノ伴奏と合奏、重奏 ・リコーダー合奏 ・器楽合奏 ・合奏 ・オペレッタ ・その他○○オリジナル (スペシャルメニュー)	器楽合奏
私たちの作品 の魅力はこれ だ!	楽器の持ちょうをい かしているところが、 すう! ぽう

図2 学習カード(グループ用)

(3) 授業の実践

ア 題材 自分たちのアンサンブルの曲をつくろう。

イ 指導計画（9時間扱い）

次 時	1 つくって表現する				2 表現し鑑賞し合う		
	1	2	3・4	5・6	7	8	9 (本時)
教材	「聖者の行進」						
学習 内容	メロディーの楽器を書き胸の題名に気づく。「聖者の行進」の鑑賞をする。	グループを作り音楽づくりの計画を話し合う	各グループごとに音楽づくりをする	音楽づくりをし、実際に演奏してみる。	中間発表会をする。お互いよいところを認め合う。	他のグループのよさを取り入れながら演奏の工夫をする	音楽をつくってきた過程、作った音楽について発表する

ウ 本時の指導

(ア) 目標 自分たちのつくってきたアンサンブル曲を発表しあい、お互いに聴き合いながら作りだしたアンサンブルの響きを楽しむことができる。

(イ) 準備・資料 各グループでつくった楽譜、コンピュータ、大型ディスプレイ、各グループで選択した楽器、学習カード

(ウ) 展開

学習内容・活動	教師の働きかけ・評価
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「各グループでつくった聖者の行進」を発表しよう</p> </div> <p>2 各グループごとに発表の準備をする。</p> <p>3 各グループごとに発表をする。</p> <p>(1) どんな工夫をしたのかを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ふしに合う和音をもとに、伴奏をつくる。 ○ 前奏・間奏・後奏をつくる。 ○ リズム伴奏をつくる。 ○ 歌詞をつくる。 ○ 演奏にめりはりをつける。 <p>(2) つくった曲を演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コンピュータを用いグループでつくった音楽を再現する。 ○ 自分たちが選んだ表現方法で発表する。 ○ 感想を発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いが十分表現でき、お互いの作品のよさを認め合えるようにする。また、「作品のよさ」に注目して鑑賞できるように支援する。 ・自分たちでつくった楽譜を他のグループに配付するよう助言する。 ・各グループが、それぞれ自分たちだけで練習できるように部屋を分け、練習の状態を確認する。 ・自分たちの魅力を強調し表現できるように支援する。 ・曲をつくる際にどのような過程でつくったか、工夫したところについて、発表できるように助言する。 ・一人一人が制作する役割や、演奏パートを発表し、一人一人の曲に対する関わりをはっきりさせ、意欲的に取り組めるよう支援する。 ・楽器の配置や譜面台の位置に気を付け、演奏が効果的に行われるように配慮する。 ・つくった音楽をコンピュータを用いて演奏し、楽譜の提示を行う。また、自分たちの制作過程が発表できるように支援する。 ・表現方法もグループで選択させ、自分の思いが十分発揮できるように配慮する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>友だちと協力し、表現を工夫して自分たちのアンサンブル曲を発表することができたか (演奏発表)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>お互いの作品のよさを認め合うことができたか (感想発表・学習カード)</p> </div>
<p>4 本時のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 他のグループの演奏に対して感じたことをメッセージカードに書いて交換し合う。 	

(4) 授業の分析と考察

ア グループ活動での工夫した点

最初グループの中では、児童一人一人がおもしろおもしろの楽器を使って表現していたが、合奏する段階になるとそれぞれの楽器の音量が違うことに気づいた。そこでまず、お互いが聴き合えるように、音量のバランスを調整した。次に、音色についても、児童一人一人のよさが発揮できるように、メロディーや伴奏を工夫して、交互に分担演奏の形で特色を生かしていた。

イ コンピュータを活用した支援の仕方について

編曲を行うには基となる楽譜が不可欠である。そのため、自分の演奏する部分について入力し楽譜を作成した。これを持ちよってグループごとに話し合いを行い、全体の構想をコンピュータでシミュレーションしたのち、児童一人一人のよさが生かせるように工夫し、編曲してコンピュータに再入力していた。最後にプリントアウトした楽譜(資料1, 2)を持って、各自グループごとに練習を行った。

ウ 前奏・間奏・後奏の創作

「聖者の行進」のイメージに基づいて、児童一人一人が各自の発想で前奏・間奏・後奏の特徴をとらえ、それぞれの持ち味が出るように、工夫しながら分担し創作した。それをまとめて演奏できるように協議しながらつなげ、ひとつの楽曲に仕上げた。

資料1 コンピュータでつくった楽譜 (リコーダーの二重奏譜)

Two staves of music for recorder. The top staff is labeled '1' and the bottom staff is labeled '2'. A bracket above the first measure of the top staff is labeled '伴奏' (Accompaniment). The music consists of rhythmic patterns of eighth and sixteenth notes.

資料2 コンピュータでつくった楽譜 (ピアノの伴奏譜)

Two staves of music for piano. The top staff is the treble clef and the bottom staff is the bass clef. The music features a complex rhythmic accompaniment with many sixteenth notes and chords.



図3 グループ練習風景



図4 発表会

(5) 授業研究の成果

ア ビデオを鑑賞することにより、曲のつくり方や楽器の選び方の見通しをもつことができ、児童一人一人が思いや願いをもって、グループでの話し合いに参加できた。また、楽曲の解説を聴くことによって、曲に対するイメージを広げ、歌詞づくりなどに意欲的に取り組んだ児童もみられた。

イ コンピュータを活用したことで、音楽の学習に対する興味・関心が一段と高まった。つくる活動においてはコンピュータを使って、自ら進んで曲をつくっていく活動がみられるようになった。また、自分でつくった音楽が楽譜とともに紹介されることで、児童の成成感は大変高まった。さらに、コンピュータを活用することで、児童は自分のつくった音楽を確認することができ、創作活動に深まりがみられた。

ウ 楽器や演奏方法が自由な選択になると、各グループで音楽づくりの見通しを話し合う必要性が生じ、グループの中で話し合いが積極的に行われた。

エ グループの中で一人一人の役割がはっきりしていたことにより、児童一人一人の個性が生かされるとともに、グループのまとまりもでてきた。

オ グループごとに部屋を分けたことにより、各グループとも自分たちのめあてにそって、集中して学習を進めることができた。(図3)

カ お互いに聴き合う活動を通して、自分たちがつまずいている課題に対し、解決のヒントを得たり、自分たちにとって今後の新たな課題をつくっていくことができた。また、発表会(図4)で自分たちの学習の成果がお互いに確認でき、大きな成成感を味わうことができた。

(6) 今後の課題

ア 児童一人一人が主体的に取り組む個別的な学習をさらに充実し、一人一人の個性に応じた助言・支援・評価の在り方を研究する。

イ 音楽を構成する諸要素についての知識や、読譜力、基礎的・基本的な力を日頃の学習活動でどのように位置づけていくのかを研究する。

ウ コンピュータの活用の幅を広げる。また、楽器や表現方法を選択するときの支援の在り方を研究する。

【授業研究2】 中学校第2学年「生徒一人一人の表現力を高めるグループ合唱」の指導

(1) 授業研究のねらい

生徒一人一人が合唱活動を通して自分のよさを表現し高めるには、一人一人が題材にそってイメージをもち、合唱における響き合う楽しさや歌うことへの喜びを体験し、自から進んで表現活動をしようとする意欲を育てなければならない。また、誰もが気軽に参加できる態勢を取りながら、生徒一人一人が自分の役割の大切さと責任を果たすことにより、生徒同士が表面に現れないこころの結びつきを感じ取ることが大切である。生徒は、自分たちの目標に向かい一致協力する態勢をつくりながら合唱活動に取り組めば、感動体験を共感できると考える。そこで、本研究は一人一人のイメージを明らかにし、グループ活動の形態をとることによって、お互いのよさを認め合い、主体的な合唱活動への取り組みや一人一人の表現力を高めることをねらいとした。

手だてとしては、一人一人のイメージやよさを認め合えるように、小グループに分ける。各グループのリーダーを中心に話し合いの場を設定し、自分たちに合った無理のない活動計画や役割の分担を行っていけば、生徒一人一人の表現力は高められると考える。そして、その指導の在り方について、授業研究を通して明らかにするものである。

(2) 主体的に活動できるようにするための手立て

ア グループごとの計画立案

生徒は目標、楽曲の選曲や声部による編成などの計画を自分たちで立てる。グループ合唱は人数が少ないため、自分たちのよさを生かしやすい。しかし、無理が生じないように努めなければならない。生徒一人一人がお互いに自分のパートに責任が持てるように計画を進めていく。

(ア) 毎時間ごとの目標の設定

各グループごとに前時の反省を踏まえ、次の時間のめあてを立て毎時間ごとに発表する。

(イ) 楽曲の選曲

生徒は校内発表会で、クラスにとってふさわしい合唱曲が選曲できるように、曲目（自由曲）を各グループでリストアップする。中間発表会や最終発表会でのグループ発表を通してよりふさわしいものになるように選考し、1曲に絞っていく。

(ウ) 学習形態の工夫

各グループの構成人数は、一人一人が個性を生かし、グループ合唱によってお互いに協力し合いながら、表現の工夫をするために何人くらいが適当か話し合いをして決める。

楽曲（自由曲）の選曲に混声四部合唱を選ぶグループが出る可能性があるため1パート3人、計12人程度にする。また、パート（各パート9～10人）の表現力がそれぞれ平均するように配慮して三つに分ける。最終的には合体し、クラス全員での合唱ができるようにする。

イ 各グループのリーダーの養成

生徒一人一人のよさを認め合うためには、歌詞の内容や曲想について、各自のイメージに基づいて話し合いをもつ。グループのリーダーはパートの割り振りを行い、一人一人のよさを生かしながら各グループの個性や特徴を集約し、表現できるように工夫する。リーダーを中心に各時間ごとの課題を設定し細かい練習計画をたてる。また、リーダーだけで話し合う時間を設定し、各グループの進行状況や問題点を話し合う。

ウ 発表会の実施

他のグループの発表を聴くことによって、自分たちにはない表現の工夫等について発見することができる。また、一人一人の感性に訴えることで、次時への意欲づけにつながる。



図1 自己評価カードへの記入

年 組 ()

「夏の日」の振り返り		評 価 項 目			
日	今日のあゆみ	個人練習の振り返り	練習方法の工夫ができた	自分から自分のパートを練習できた	よい声・響きを出せた
9/6	課題曲の音取りをすむ。				
9/12	自分のパートを自信をもて歌う。				
9/14	ひびいた声で歌う。				
9/16	各パートのバランスを考えた歌う。				
9/22	曲の山部分を考えて歌う。				
9/26	バランスを考えた歌う。				
反省と今後の目標					
9/5	みんなに引かれて自分のパートがうまくなかった。	○	△	△	△
9/12	あまり声をだせなかった。	○	△	△	△
9/14	あまりうまくなかった。	○	△	△	○
9/26	うまくなかった。	○	○	△	○
9/22	山部分のうまくなかった。	○	△	○	○
9/26	山部分のうまくなかった。	○	○	○	○
9/26	山部分のうまくなかった。	○	○	○	○
9/26	山部分のうまくなかった。	○	○	○	○

【感想・反省】はじめての曲の練習をして良かった。自分から自分のパートを練習できた。みんなに引かれて自分のパートがうまくなかった。あまり声をだせなかった。あまりうまくなかった。うまくなかった。山部分のうまくなかった。山部分のうまくなかった。山部分のうまくなかった。

図2 ミュージックカード

エ 学習カードの活用

生徒一人一人が各自学習のねらいを明確にもって活動できるように、ミュージックカード(図2)を活用する。これによって各自が自分の音楽的知識や技能を段階的に高めることができるとともに、音楽学習への取り組みやつまづきが分かるようする。

また、自分のよさを発見し自信につなげたり、グループ合唱評価表(図3)を活用することによって他のグループの特色ある表現や友達のよさを感じ取ったり、発見することができる。そして、次の学習へのねらいがもて、自分への新たな意欲づけにつながる。さらに、グループ活動を通して自己への客観的な見方が養われる。

観点	構想	態度	内容	点
	目標・楽譜・編曲 合唱構成・練習計画	意欲・姿勢・協力 楽しさ・積極性 伸びやかさ	発声・発音・音程・音域 強弱・速度・リズム感 和声感・曲想	10点満点
1 組	中 各パートが強い。	楽譜をみて歌うことができていた。	強弱を考えた練習ができた。	6
	終 練習ができていた。	本音が良かった。	リズム感や音程の練習ができた。	8
2 組	中 練習ができていた。	練習ができていた。	リズム感や音程の練習ができた。	7
	終 練習ができていた。	練習ができていた。	リズム感や音程の練習ができた。	9
自己 グル ープ 評価	中 練習ができていた。	練習ができていた。	リズム感や音程の練習ができた。	7
	終 練習ができていた。	練習ができていた。	リズム感や音程の練習ができた。	8.5

評価項目	評価◎○△	感 想
1 歌う姿勢は良かったですか。	△	本を眺めながら歌っていたので下ばかり向いていた。
2 口をよく開け、響きのある声が出ていましたか。	○	自分自身ではあんまり出なかった。
3 一人一人がパートの役割を正確に歌っていましたか。	◎	男子のパート、女子のパートへ入ったので正確に歌えた。
4 バランスがとれ、美しいハーモニーができていましたか。	△	○○○○さんの声がとてもよくひびいていた。
5 強弱をつけ、歌詞の内容を表現しようとしていましたか。	○	強弱の部分に表現を見ることができた。
6 その他気づいたこと		

図3 グループ合唱評価表

(3) 授業の実践

- ア 題材 豊かな響き
 イ 教材名 「夏の日の贈りもの」
 ウ 指導計画 (10時間扱い)

時 限	学 習 内 容
1・2時	グループの編成，リーダーの選出，目標の設定，自由曲の選択，練習計画の立案
3・4時	目標に基づく一人一人の細案の作成，個々のよさをだすための表現の工夫
5・6時 (本時)	グループ内パート練習，テープレコーダーを使ったチェック，声部間バランス調整 中間発表会
7・8時	中間発表会での評価に基づく調整，練習計画の見直し，クラス全員での演奏
9・10時	楽曲全体の構成と分析，音楽の流れや表現の指導，歌詞に基づく発音，発声の確認

エ 本時の指導

- (ア) 目 標 グループごとに工夫しあって合唱を練習し，一人一人の表現のよさを味わうことができる。
 (イ) 準備・資料 教科書，リコーダー，キーボード，ピアノ，テープレコーダー，録音テープ，学習カード
 (ウ) 展 開

学 習 内 容 ・ 活 動	教師の支援と配慮・評価	
1 既習曲を歌う。 全員で「君に会えて」の合唱をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・「君に会えて」の合唱で，姿勢・発声などを注意して歌うよう助言する。 ・主旋律以外の他のパートを歌う場合，音を注意深く聴き，またハーモニーの美しさを感じとるように助言する。 ・前時までの活動を振り返り，本時の目標を達成できるよう，また，グループで協力して活動できるよう働きかける。 ・生徒一人一人のよさが発揮され，グループごとの特徴が表現されるように，配慮する。 ・歌詞の内容を理解して，みんなの気持ちを合わせて歌うように助言する。 ・掛け合いの部分や並行して動く部分に注意するよう助言する。 ・曲の山がどこなのかを確認して練習するよう助言する。 ・強弱をつけたり，声の出しかたに注意して歌い方を工夫する。 ・リーダーの司会で，発表会を進めるようにする。 ・生徒の感想と助言は，問題点の指摘だけでなく，各グループの表現の特徴や友達のよさが言えるように配慮する。 	
2 本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> グループごとに工夫しあって合唱を練習し発表し合おう </div>		
3 グループに分かれて合唱練習をする。 ○ リーダーを中心にして話し合い，表現の工夫をする。 ○ 他の旋律の動きを感じながら合唱する。 ○ 曲の山と終結の部分の表現を練習する。		
4 中間発表会を行う。 (1) 挨拶 (2) 発表グループからの一言 (3) 演奏 (4) 評価 (5) 生徒の感想と助言 (6) 教師の感想と助言		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> お互いの演奏を楽しむことができたか (観察・評価カード) </div>
5 グループに分かれ，発表会の反省をし，自己評価をする。		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 課題にそった学習ができたか 一人一人のよさが発揮できたか </div>
6 全員で「夏の日の贈りもの」の合唱をする。		<ul style="list-style-type: none"> ・全員で大合唱のよさを味わう。

(4) 授業の分析と考察

ア グループ合唱を通した生徒一人一人の表現力の高まり

声を出す。という基本的な点では各グループとも、リラックスした雰囲気をつくり、それぞれの目標にそって精一杯合唱をしていた。3グループともこのびのびと素直に声を出しており、各々の特色を出していたのがよかった。しかし、全体的に音量バランスは混声三部編成であったために、女声は2つに分かれ、男声が出過ぎてしまう傾向があった。グループの中にはこの点に着目し、フォルテの部分だけ男子の一部に女声パートを歌わせていた。これは、グループの中での話し合いが活かされ、その解決策の一つとして考えられたことが発表後の感想で明らかになった。すべてが成功につながるわけではないが、このような工夫が所々みられ生徒たちの真摯な姿勢に共感をおぼえた。

イ グループのリーダーの役割

各グループのリーダーには、それを補うパートナーが複数存在する。リーダーは常に客観的な視野で眺め、一人一人のよさや特徴をよくとらえていた。そして、決して無理をせず音楽的に難しい部分についてはパートナーの協力を得て、自分の持ち味を發揮しながらスムーズに進行させていた。グループでの活動にリーダーはなくてはならない存在である。しかしその選出となると、生徒は結果だけを考えてつい尻込みしてしまう。今回はリーダーへの協力体勢が万全であり、リーダー同士のコミュニケーションを図るための場を設定していた。これは生徒相互の理解を深め、意思統一を図ることに役立ったと思われる。合唱のリーダーは音楽的な素養が十分ではなくても、要領さえ飲み込めば誰にでもその責務を果たすことができる、ということを実践によって明らかにしていた。

ウ 中間発表会の位置づけ

人前で発表することは緊張感を伴い、生徒にとっては苦手なようだ。12名という少人数であったためか、女子の中には声が出なくなってしまうものもでて、音量のバランスを崩した原因にもなっていた。しかし、発表することによって得たものも多かったようだ。また、逆に責任を感じて頑張ったり、伸び伸びと自分の力を發揮する生徒も何人かいた。生徒一人一人が自分のよさをとらえ、よい部分を伸ばして行くためには、いろんな場を設定することが大事である。そして、中間発表会のような、比較的实施しやすい小さな発表を重ねることによって、さらに大きなステップが導き出せる。

エ 一人一人の主体的な取り組み

合唱に取り組むためには、生徒一人一人が同じパートやグループ内で結束することが必要になってくる。お互いに力を合わせ、取り組んでいる姿については、「最初は1パート3人しかいないので歌えるのか、どうになってしまうか心配だったが、始まるとみんな自分のパートに責任をもって一所懸命歌っていた。すごいな、と思うと同時に何んだかうれしくなってしまった。」や「グループで積極的に話し合いがもたれたように思う。」「音楽の時間になると、みんな真剣になり集中して歌っていた。録音で聞く自分の声は意外だったが、バランスもよく取れるようになり、まとまって歌うことができた。」などを学習カードの感想文で確認することができた。



図4 グループ練習



図5 中間発表会

(5) 授業研究の成果

ア 生徒はグループのリーダーを中心に各グループごとに学習計画をたて、実践し、発表を行うことにより、一人一人が自分のよさが分かり、自信や満足感が得られるようになった。さらに一人一人が協力し合い練習(図4)することで、主体的な学習態度も見られるようになった。

イ 各グループは特色を出しながら、中間発表会(図5)を行うことによって、自分たちの課題に迫ることができた。また、表現を工夫する話し合いも活発に行うことができ、生徒一人一人がお互いに意思疎通を図ることの大切さを認識することができた。

ウ 他のグループの発表を聴くことを通して、お互いによさが分かったことで、より美しい合唱を目指そうという意欲が見られるようになった。

エ 少人数で合唱することによって細部が明確になり、生徒一人一人の表現技能が高められた。

オ 授業の最後に行ったクラス全員の合唱では、普段あまり意識しなかったハーモニーや響き、深みなどが味わえ、合唱のよさをあらためて感じる事ができた。

カ 授業はのびのびとした雰囲気の中で進められ、生徒一人一人は問題解決に向けて努力することができた。また、各グループとも、自分たちの持ち味を出し全員が協力し合って楽しみながら活動していた。

(6) 今後の課題

ア 器楽指導に比べ歌唱指導の難しさを実感した。体で感じそれを表現していくことは、実際の音楽活動の中ですぐにできない場合がある。そのため、今後はビデオや録音テープなどをフルに活用し、生徒一人一人の姿勢や表情、響きのある発声、ダイナミクスなどを確認し合って、音楽表現における身近な課題を見つけていく。

イ 生徒一人一人が自分たちの手で仲間と共に作り上げて行こうとする姿を見て、これを根気強く続けていくことが結果的には学習意欲や学習態度の向上につながるのではないかと考えた。これからも研究の課題として、継続的に取り組んでいく。

おわりに

児童生徒が自分のよさや可能性を発揮し、主体的に表現活動に取り組めるような指導方法を、二年間研究してきた。歌唱、器楽、創作の各領域において、グループという形態を取りながら、リーダーを養成し、児童生徒一人一人が自己の持ち味を損わず、それを生かしながら表現活動を行っていくことが大切である。そこには、音楽に裏打ちされた一つの信頼関係が必然的に生まれることになる。そして、学習意欲は高まり、音楽的資質もさらに高められる。

(1) 授業研究の分析と成果

ア 小学校の授業研究では器楽の題材にそって、子供たちが六つのグループに分かれた。コンピュータに音符を入力し、楽曲全体のシミュレーションを行っていた。

イ 自分の持っている演奏技能に応じた活動を選択し、使用する楽器は何が適当か、コンピュータで音色を見つけてから、各自、演奏上の役割を分担していた。

ウ コンピュータを使って、グループごとにパート譜を作成した。各自が決めた楽器を手に練習室（空き教室）にいき、グループ練習を合理的に進めていた。

○ 各グループとも、つまづいている部分についてリーダーを中心に話し合いを持ち、教師は子供の目の高さで支援を行い、合奏に無理のない方向で解決していた。各グループとも自分たちの個性がより発揮できるように目標を持ち、計画にそって練習を重ね発表を行っていた。

○ A男は自分を表現するには、歌が最も適していると考えた。自己のイメージにそって詩を書き、発表の際には歌を歌いながら行進をした。他の生徒から拍手喝采をあげ、自信を深めた。

エ 中学校の授業研究では合唱曲を題材に選び、練習の過程でクラスを三つに分けていた。この題材によるイメージのもとに、各リーダーがそれぞれ本時のねらいを発表していた。生徒たちはそれにそって、グループごとに各練習室に分かれ、リーダーを中心に音や息の合わせを行いひびきが不十分なところを繰り返し練習していた。

オ 混声三部合唱であるため、男女のバランスがうまく取れず苦勞していた。テープレコーダーを使ってプレイバックを行い、入念にチェックを行っていた。

○ 一つの合唱曲を仕上げるにもいろいろな方法があるが、譜読みや音取りなどの基礎的な段階はできるだけ合理的に行いたい。しかし、仕上がりの善し悪しの原因はほとんどこの部分にあり、授業でのポイントは極めて重要であった。

○ 生徒一人一人のもつ声の広がりや深みは、大勢の合唱の中ではとらえにくい。そこで、いくつかのグループに分けてアンサンブルの形態で交互に合唱をし合えば、各自のもつ声の広がりや深みは肌で感じられ、また、バランスもお互いのよさも感じ取れると思われる。そのよさが身につけば意欲はさらに高まり、時間的なロスも省けるようになると思われる。

(2) 今後の課題

児童生徒一人一人が自分のイメージや感じ方、考え方を広げ深めながら、生き生きとした音楽活動が展開できるようにするには、題材の指導計画を作成する際、児童生徒一人一人が自らの学習意欲を高め、自ら進んで学習活動を行っていくことができるような学習内容を設定する必要がある。このことは児童生徒が音楽活動を通して、豊かな自己実現を図っていくことにつながるものである。今後も、児童生徒一人一人が自分のよさや可能性に気づきながら、自ら進んで学習活動を展開できる能力を身につけさせるための支援の仕方や授業形態の工夫、教材・教具等の選択の仕方について、さらに研究する。